

3759  
Shi 14  
資料室

中等  
教育  
國語  
讀本  
新村  
出編  
卷六



41708

教科書文庫

4
810
41-1918
20000 42083

Kodak Gray Scale

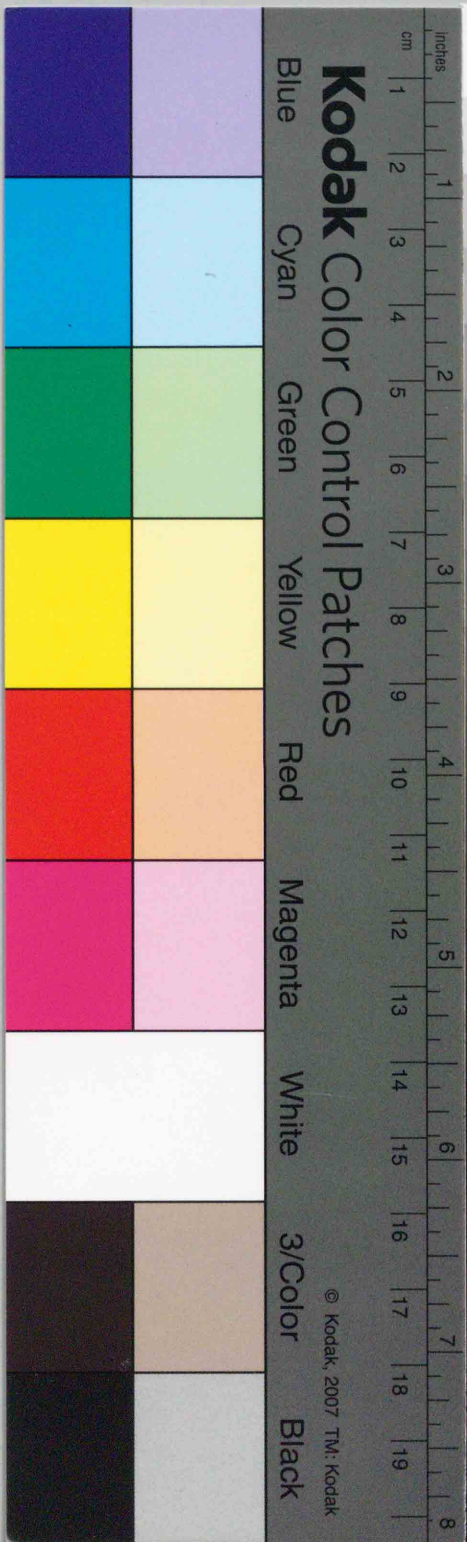
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black





375.9  
Shi/4

教育部定濟  
大正七年一月廿六日  
中學國語科用

文學博士新村出編



中等  
教育  
國語讀本

東京  
開成館藏版

卷六 目次

一	アジャ魂	山路	愛山	一
二	帖木兒の墓を弔す	大庭	柯公	六
三	旅ごゝろ	島崎	藤村	一〇
四	オリンピックヤの回顧	黑板	勝美	一五
五	湯本より	田山	花袋	二二
六	聯合艦隊解散告別ノ辭			二九
七	光の國	吉江	孤雁	三四
八	秋十句			三六
九	詩的言語	芳賀	矢	四〇

卷六 目次





一〇	秋の夜	幸田露伴	翌
一一	瀬戸内海		翌
一二	白峯の陵	上田秋成	五
一三	自覺	幸田露伴	五
一四	牛	三宅雪嶺	五
一五	教訓の歌		六
一六	武藏野	國木田獨步	六
一七	田舎すまひ	徳富健次郎	六
一八	蘇武	坪内逍遙	七
一九	伊藤博文公を誅ぶ	井上馨	七
二〇	提唱	夏目漱石	八

二二	元寇 <small>その一</small>	三宅雪嶺	七
二三	同 <small>その二</small>	同	七
二三	冬十句		九
二四	戦場が原		九
二五	雪前雪後	幸田露伴	一〇
二六	鳩巢に與ふ	新井白石	一一
二七	白石に與ふ	室鳩巢	一一
二八	趣味	幸田露伴	一二
二九	歐洲大戦と工業 <small>その一</small>	秋山眞之	一三
三〇	同 <small>その二</small>	同	一七





中等 國語讀本 卷六

文學博士 新村 出 編

一 アジャ魂

山路 愛山

現代は國家と國民と一致して、同じ目的に向かつて働き、大きな國を立てなければならぬ時代に進んで來た。故に今日の最急務は、國是を定めることである。國家も人民も共に向かつて進まなければならぬ一つの方角を立てることである。それを立てて世界の戰場に乗出さなければ、我々は劣敗者の位置に落ちてしまはなければならない。我々は是非



とも衆心を揃へて、一つの目的に向かつて突進しなければならぬ。即ち全國民の力を一つ處に傾注しなければならぬ。其の最大な國是といふのは何であるか。言ふまでもない。大きな大日本帝國の建造である。世界が大きな帝國を造らうといふ場合には、我々も大きな大日本帝國を造る土臺を据ゑなければならぬ。これは我々に取つては相應しい事業である。日本民族としては、その人種的本能の向かつて進まねばならぬ運命であると言つて宜しい。

我々は島の中にはひつて島の帝國を造つて居つたから、世界的帝國には全く縁の無い民族だと思ふのは、大きな間違である。我々に一番血縁の近い滿洲人は曾て支那の北方に

金國の朝廷を建て、近頃は滿洲の朝廷を建てた。滿洲の朝廷のやうなのは、世界で最も人口の多い最も廣大な帝國を支配して居たではないか。滿洲人ほど我々とは人種的關係が近くはないが、さりながら同人種ともいはれる蒙古人は曾てはロシアを取り、インドを取り、支那全部を取り、世界に比類のない大帝國を造つたではないか。トルコ人も亦長い間ヨーロッパ人を怖れさせた帝國の主人ではなかつたか。我々はアジア人であるといふ點で、大きな帝國を建てるのに相應しい民族であると、自ら信ぜねばならぬのである。アジア人の英雄は權勢を好んだ。權勢を好み勇氣の盛な點では、世界の歴史に比類のないものであつた。彼等の中には



一生の間、帝國を造り王國を造ることに努力して、その他に樂のあることを知らなかつた者が多い。ヨーロッパ人の怖れたチムールといふアジアの豪傑は、蒙古人といふよりも寧ろトルコ人といはねばならない血統であつたが、彼の第一の目的は、世界を征服して世界的帝國の君主になることであつた。天下後世の限ない尊敬の中に生きて居たいといふことは、彼の第二の希望であつた。彼はその帝國を造るために五十年の間努めた。五十年の間、戦争と政治とに惟日も足らない努力をした。彼の生涯に本當の幸福な時期、即ち政治にも戦争にも骨を折らない氣樂な時期といふのは、たつた二箇月しか無かつたと言はれて居る。彼はその帝國を建て

るためにその身を費し盡くして厭はなかつたのである。日本の徳川家康は、その七十五年の生涯で、本當の樂隱居の境遇を樂しんだのは、僅に數月に過ぎなかつた。彼は息を引取るまで日本國の治安を懸念して居た。

かやうに大きな帝國、大きな王國を建てて、さうしてその治安を維持するといふことに一生を費し盡くして厭はなかつたのは、アジア魂である。アジアの英雄にはかやうの人が多い。西洋の歴史家は、かういふ權勢慾に對しては可なり惡口も言ふ。さりながら大きな國を建てようといふ慾望と、その慾望に並行する勢力と、おのが血の最後の一滴も政務のために費すことを惜しまない精神とは、アジアの英雄の特



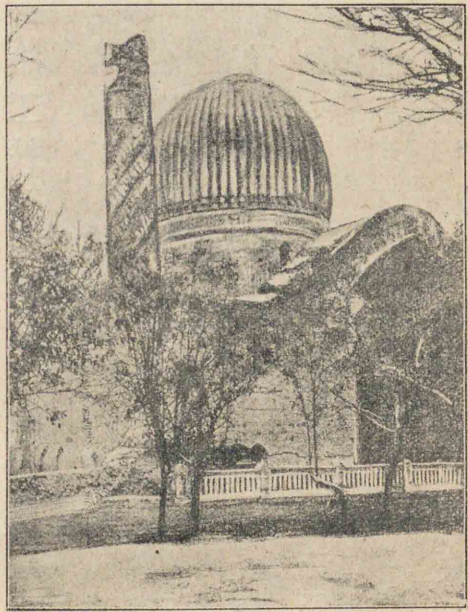
徴である。アジャ人は恰も人を支配するため生まれ来たやうなものである。我々日本人も亦アジャ人であるといふ點で、我が日本帝國を更に大きな帝國とするのに努力することは、人種としてのその本能に相應しい事業であると思ふのである。

二 帖木兒の墓を弔す

大庭 柯 公

寺門の前に馬車を駐めて、予はサルト人の御者を先導として歩を運ぶに、外壁の門に沿うて廻れる處、垂柳の老幹、翠枝新に、門側の圓柱、琺瑯半ば剥落して古趣津々たり。寺門を入れば、十數丈の堂宇まづ人を壓し、堂側の圓塔、堂奥の穹窿殿

帖木兒の墓  
中央アジャな  
るサマルカン  
ドにあり。  
サルト人  
中央アジャの  
一土族。



帖木兒の墓

蒼空に聳えて、人をして仰瞻に堪へざらしむ。寺門と堂宇との間、優に百餘武、石舗坦々たり。堂前に至るに、洋装の拜禮者まづあり、合掌默念するに似たり。その顧る時、予

は彼が波斯の一紳士たるを認めたるに、彼亦予に一揖して、予の日本人たるべきをいふ。彼が佛露兩國語を自在に語り得て應接するの態、さながら歐洲人に似たり。而も彼の予に於ける、一見舊知の人の如く、帖木兒を賞揚して、亞細亞人の



ために氣を吐くこと萬丈。顧ればサルトの寺僧三五、既に吾等の身邊に來りて、寺内の嚮導に任ぜんとするあり。乃ち波斯の紳士と共に導かれて堂内に入る。堂宇の内部、石床、土壁の堅牢驚くべく、壁上窓欄の細工妙技、六百五十年の風塵、古色の掬すべきあり。忽ち見る。眼前に石棺七基の横たはるあり。同伴の紳士、予を顧、おごそかに堂奥に近き一棺を指していふ。これ我が亞細亞の英傑帖木兒の靈骸の安置せらるゝ處と。棺は黒大理石にて作り、長さ八九尺、幅三尺許、高さ亦三尺餘、棺上亞刺比亞文字を一面に刻す。隣するもの皆その血族の棺柩、白大理石にて作りて、帖木兒の棺と區別す。七棺の前面に小石壇あり、犠牲を

供ふべき祭壇なり。吾等二人、寺僧五六、今正にかの黒棺の前に臨みて佇立凝視するに、かの波斯の紳士、感慨禁じ難きが如く、香料を僧に致して棺前に讀經せしむ。經を捧ぐる時、彼等皆跪坐し、予も亦跪坐す。音甚だ微、而も堂内四壁に響きて靜寂を破り、四邊一種の氣に滿つ。その讀經を終へたる時、衆皆緩やかに拍手すれば、香煙徐ろに帖木兒の黒棺のあたりに上る。

禮拜の後、寺僧吾等を導きて更に下層の堂窟に下る。四顧陰黒、僅に上階四窓の微光を送るに過ぎず。導人燭を秉つて行く。窟内に安置せる一石壇、これ帖木兒の記念碑石にして、後人の建てたるもの。人をして巴里なるパンテオン下層の石

パンテオン  
パリにある  
フランス名士  
の墓所。



室を偲ばしむ。

三 旅ごゝろ

島崎藤村

響りんく、音りんく、  
 打振る鈴のおと高く、  
 馬は蹄をふみしめて、  
 故郷の山を出づる時、  
 そのかぐろなる鬣を  
 涼しき風のふき亂り、  
 その紫の雙の眼は  
 青雲遠く望むかな。

枝のみどりに袖觸れつ、  
 あやしき鞍にまたがりて、  
 馬上に謠ふ一ふしは、  
 ひにや遊子の旅の情。  
 あゝ幼くて國を出で、  
 東の磯邊、西の濱、  
 さても繋がぬ舟のごと、  
 夢長きこと二十年。  
 たま／＼今年かへり來て、  
 昔懐へば、ふるさとや、



陰を岡べにたづぬれば、  
松柏すでにをれくだけ、  
徑を川べにもとむれば、  
野草は深く荒れにけり。  
菊は心をおどろかし、  
蘭は思をいたましむ。  
高きに登り、草をしき、  
惆悵としてながむれば、  
檜原に迷ふ雲落ちて、  
涙流れてかぎりなし。

いね、いね、かゝる古里は  
再び言ふに足らずかし。  
あゝ、よし、さらば今日よりは  
日行き、風吹き、彩雲の  
あやにたなびく彼方をも、  
白波たかく、八百潮の  
湧立ちさわぐ彼方をも、  
彼處の岡も、この山も、  
いづれ心の宿とせば、  
繁れる谷の野葡萄に



秋のみのりは取るがまゝ、  
深き林のもみぢ葉に  
秋の光は履むがまゝ。

響りんく、音りんく、

打振る鈴のおと高く、

馬はかうべをめぐらして、

雲にいなゝき勇む時、

かへりみすれば、古里の

檜原は目にも見えにけるかな。

四 オリンピヤの回顧

黑板勝美

オリンピヤ  
今ギリシヤ國  
モレヤ半島の  
西邊にあり。  
キレネ  
今クレイナと  
いふ。アフリ  
カ北岸トリボ  
リにあり。  
シラクサ  
シラクキウス  
といふ。イタ  
リヤ國シ、リ  
島の東岸に  
あり。



ゼウス

オリンピヤのゼウス神は、總ギリシヤ人の神、ギリシヤ全土の信仰を得た神である。四年に一度のその祭日には、南はアフリカのキレネ、西はイタリヤのシラクサ、東は小アジアあたりまで、苟もギリシヤ人の住んでゐる處からは、幾千幾萬の人々が集つて來たのである。オリンピヤの廢墟の奥に一部分のみ址の發掘された演技場は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔦葛が高く茂りあつて、半ば壞れたローマ時代に建てた凱旋門に



纏はつてゐるのが、如何にも名譽の月桂冠であるかのやうである。

こゝで四年ごとの大祭日に大演技が催された。その間は神聖な平和の日として、ギリシヤ全土の人々が敵身方を忘れて、大演技に列したのである。ギリシヤ全土の一致結合は、このオリンピヤの演技によつて出来たといふも過言ではない。國民全體が面白く愉快にこゝに集り、各州の選士が雲を呼び風を起して、龍虎相搏つたのは、如何に壯快に且目覺しかつた事であらう。

集つて來た人々の中には、詩人もあつたであらう。學者もあつたであらう。ヘロドトスのやうな歴史家も、デモステネス

のやうな雄辯家も、テミстокレスのやうな勇將も、さては政治家も、法律家も、富者も、貧者も、名門も、平民も、あつたであらう。そのあらゆる階級、あらゆる職業の人々が互に顔をあはせ、談笑周旋、この間を徘徊した様が、如何に面白く且賑やかであつたらうか。

若しこゝに名工や大詩人があつたとせよ。彼の靈腕や彼の妙筆はこの群集によつて得る所がなかつたであらうか。人生を研究する好機、人間を捕へる機會は、彼等の決して逸しなかつた所であらう。想ふにこの演技は單に演技そのものの進歩のみを來したのではない。哲學、歴史、戯曲、音樂、彫刻などの發達に影響したことも尠少ではなかつたのである。



ベルシヤ戦役  
 ギリシヤ全國  
 民がベルシヤ  
 の入寇に對し  
 て戦ひたるも  
 の。約二千四  
 百年前。

この祭には市場が立つ事になつて居た。物資の交換賣買が如何に全國の商業農業を益したことであらう。かくて思想知識の交換、延いては感情の融和が、國民の一致に暗々裏に貢獻する所があつたと同時に、商工業等にも影響したものが多かつたのである。彼等はペルシヤ戦役に於て、國民的敵愾心の絶頂に達した。この時小怨を棄てて大敵に當り、よく東方の強を挫くことが出来たのは、このオリンピヤの演技に負ふ所が少くないと思ふ。

あかもその演技者は決して職業的の者ではなかつた。たゞ各地方から出た青年選士であつた。この演技が後にローマ時代に入つて職業的となつた時は、それがはや衰へ始めた



オ リ ン ピ ヤ の 競 技

日であつた。この演技は、ギリシヤ全國民を眞の勇者とするのが目的であつて、全國民の體格と意志との發達は、この演技によつて益、助成せられた。古代ギリシヤに於ける教育のモトトは一言で盡さる。曰く、「健全なる肉體には健全なる精神宿る。」と。これである。たゞこの健全な精神を養成しようとして、健全な肉體



を作るのに苦心したのである。ギリシヤの彫刻にはこの意味が現れて居る。ギリシヤの文學にもこの意味が見えて居る。

オリンピヤの祭典は、ギリシヤの歴史の始つてから、長く國民的祭典としてローマ時代まで連続した。その事蹟はギリシヤの文化と共に、永久に亡びることがないであらう。我が國には、このオリンピヤ演技のやうなものは無用であらうか。各階級を通じ、各地方を通じ、擧つてその選士を出して龍攘虎搏の壯快な競技を演じさせ、之を観る者もまた全國到處から雲集するといふ一つの演技場の無いのは、盛世の一大遺憾ではなからうか。余はオリンピヤに遊び、雷雨を衝

いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草の生ひしけるに任せた演技場址を徘徊して、古ギリシヤの文化の淵源がこゝに在ることに想到したとき、天來の聲があつて、余の心耳にさゝやいていふ、我が國民の崇敬し、信仰する伊勢神宮の神苑に一大演技場を建て、その大祭日に全國民の競技を演じさせよ。し。し。

五 湯本より

田山花袋

拜啓

海城にて怪我したることは既に前便にて御承知と存じゆ。其後海路も恙なく、この月の九日に宇品に歸著致

海城 南滿洲にある  
明治三十七八年戦役の古戦場。大連より約七十里北。  
宇品 廣島市の南一里餘にありて廣島灣に臨める港。



ゆ。新橋停車場に下りし時は、服の破れ、顔の憔悴したるに、友は皆見違へ申す程にてゆひき。半歳の遠征、その苦を追想致ゆへば、貴兄がこれより冬營し給ふこと思ひ遣られ申ゆ。一昨々日、萬事を排して、この山中に著し、まづ一週日程は靜に病を養ふつもりに有之ゆ。日光は君も御存じ、否々、曾て一度は御一緒にその山水を覽巡りし處、湯本のこの宿に滞留致ゆ事を申上げたるだけでも、小生がいかにも日を送りゆかは直ちに御推察なされゆ事と存じゆ。されど、この今の淋しさ、小生の宿せる旅亭は勿論、湯本十幾軒の旅亭を通じて、客と申しては、小生只一人、實にしみぐと秋の淋しさを味はひ申す

湯本  
また湯元。日光の奥、湯湖の邊にあり（この巻一〇一章章挿入地圖を看よ）

次第にゆ。たゞ申上げたき事御座ゆ。小生が戦地より戻りし身なることを旅亭の老主人に語り申ゆに、それはそれはと非常に珍しがりゆて、是非く夜分にてもその物語せよとの事にゆ。その時は好い加減に挨拶致置きゆひしに、夜になりゆへば、果して是非戦地の御話願ひたしと申來りゆ。小生は御存じの通り話下手ゆゑ、斷らんとは存じゆひしかど、山中の老翁老婆、殊に圍爐裏を圍みての物語、趣味深きを思ひゆて、直ちにこれに應じ申ゆ。

想像したまへ。圍爐裏の周圍には、湯本を盡くしての老若男女、殊にこの家の隣家の主人は召集せられて滿洲



南山、得利寺、大石橋  
共に明治三十七八年戦役に  
わが第二軍の  
激戦したる地  
にして、南滿  
洲にあり。

に居りゆとかにて、その家の妻、番頭など、最も熱心なる  
聽者に有之ゆ。自在鍵には黒き鐵瓶湯氣を吐き、古風の  
洋燈薄暗く一室を照らし居りゆが、平生訥辯なる小生  
がいかにも興に乗りて、南山、得利寺、大石橋の戦争の物語  
を致ゆひしことか。思ふに、いかなる辯士もこの上には  
出づまじく、またいかに名望すぐれたる有名なる政治  
家なりとて、この夜小生が得たるやうなる心よりの喝  
采、心よりの嘆賞を得ゆ事はあるまじと存じゆ。  
無邪氣なるは山中の老爺老婆に御座ゆ。それにしても、  
意味深きはその時の光景、貴兄等遠征の將士はその頃  
いかになして居給ふらんと考へ及びゆへば、千里隔て

橋中佐  
陸軍歩兵中佐  
橋周太。明治  
三十七年八月  
三十一日遼陽  
附近の首山堡  
にて戦死す。

しその地のことも目に見ゆるやうに覺えられ申ゆ。貴  
兄もこの書簡によりて日光山中の老爺老婆を偲び給  
へ。かれらは心よりこの戦争に同情致し居ることゆ。  
血潮の流れたる死骸や彈丸の飛び來る場合のことを  
語りゆへば、かれらは皆目のあたり、見もし聞もしたる  
やうに感じ、いづれも感極りて袖に涙を拭ひ申ゆ。殊に  
橋中佐戦死の状況を語りゆ時などは一座黙して少時  
は言葉を發するものも無之ゆひき。物語終りし後も、さ  
まざまなる質問盡きず、清人の汚き生活なども、少から  
ずかれらの好奇心を惹き申ゆ。  
かくて談話の終りしは、夜の十時過ぎにもゆひけん。山



中の夜のそゞろ寒けく覺えぬまゝ、温泉に浴して眠らんと、内湯の扉を排しぬへば、白き湯氣の充ちたる中に、洋燈の光薄く照りて、笈より落つる水の音靜に、小生は言ひ得ぬ心地致し、溢るゝばかりなる玲瓏たる浴槽に身を投じながら、種々冥想に耽り申ぬ。この靜けさ、この淋しさ、これをかの砲彈破裂し鮮血流るゝ戦の場に比すれば如何。これを突貫の聲凄じき敵壘前の一刹那に比すれば如何。小生は無限の感想に耽らざるを得ずぬ。半年の間に味はひ來りし悲劇、その當時はさほどにも思はずぬひしが、今この山中にありて靜に冥想致ぬへば、あらゆる悲劇、あらゆる事件、一まとめになりて、

眼の前に見ゆる心地致し、そゞろに涙の催されて、胸苦しく覺えぬ。

小生の占めたる室は六疊の間、障子は硝子を嵌めたることとて、前には湯湖の靜なる水美しう見えわたり、早五六分も色付きし紅葉の、その岸の灌木の林を縁低う縫ひたるさま、得も言はずぬ。小生は今この景色に向かひて、この筆を執れるにてぬが、この筆を執らんとてわが室に戻り來りし十五分以前のことを記して、この長き筆を擱きぬはん。家の裏に路あり、この路は紅葉の二三株美しく染めたる庭よりちよろ／＼と清き水の流るゝ土橋の上を過ぎて、大根の葉青き畑へと通ぜる



にてわがふと見れば、その畑の中央には、塵埃の山ふす  
 ふすと燻りて、煙は繪のごとく靡き渡り、その下に、この  
 家の老主人は尻からけに跣足といふかひくしき姿  
 にて、頻に大根を抜きつゝあるにてわ。何かと二つ三つ  
 物語して、それとなく首を回らせば、四面の山の紅葉既  
 に美しく、殊に上州境の峯には、さながら錦繡を懸けた  
 る如きを見申わ。それにて何たる平和にわぞや。此處  
 には争鬪も無く、不平もなく、寂としてこの自然の過ぎ  
 行くやうに、人の世も移り行くにてわ。意味深くはわは  
 ずや。満洲にての露營、風寒く、露冷に、月光千里を照らし  
 て、家郷を思ふの念、湧くがごとくにてわはん。自愛あら

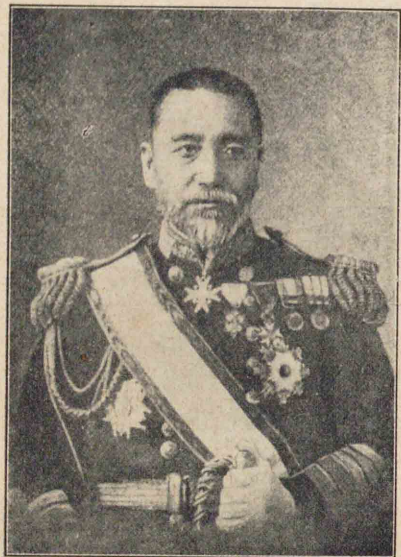
上州境  
 上州は上野の  
 こと。湯元の  
 西に接す。

んことを祈りわ。不宣。十月十五日。

六 聯合艦隊解散告別ノ辭

二十閱月ノ征戰已ニ往事ト過ギ、我が聯合艦隊ハ今ヤ其ノ  
 任務ヲ終了シテ、茲ニ解散スルコトトナレリ。然レドモ我等

海軍軍人ノ責務ハ決シテ  
 輕減セルモノニアラズ。此  
 ノ戰役ノ效果ヲ永遠ニ全  
 クシ、尙益國運ノ隆昌ヲ扶  
 持センニハ、時ノ平戰ヲ問  
 ハズ、先外衝ニ立ツベキ海



東郷平八郎

此ノ戰役  
 明治三十七八  
 年戰役。

明治三十八年  
 十月二十一日  
 聯合艦隊司令  
 長官海軍大將  
 東郷平八郎ノ  
 與ヘタルモ  
 ノ。



軍ガ常ニ其ノ武力ヲ海洋ニ保全シ、一朝緩急ニ應ズルノ覺悟アルヲ要ス。武力トイフハ艦船兵器等ノミニアラズシテ、之ヲ活用スル無形ノ實力ニアリ。百發百中ノ一砲能ク百發一中ノ敵砲百門ニ對抗シ得ルヲ覺ラバ、我等軍人ハ主トシテ武力ヲ形而上ニ求メザルベカラズ。我ガ海軍ノ勝利ヲ得タル所以モ、至尊ノ靈德ニ由ル所多シト雖モ、抑亦平素ノ練磨其ノ因ヲ成シ、果ヲ戰役ニ結ビタルモノニシテ、既往ヲ以テ將來ヲ推ス時ハ、征戰息ムト雖モ、安ンジテ休憩スベカラザルモノアルヲ覺ユ。惟フニ武人ノ一生ハ連綿不斷ノ戰爭ニシテ、時ノ平戰ニ依リ其ノ責務ニ輕重アルノ理ナシ。事アレバ武力ヲ發揮シ、事ナケレバ之ヲ修養シ、終始一貫其ノ本

分ヲ盡クサンノミ。過去ノ一年有半、カノ風濤ト戰ヒ、寒暑ニ抗シ、屢頑敵ト對シテ生死ノ間ニ出入セシコト、固ヨリ容易ノ業ナラザリシカドモ、觀ズレバ是亦長期ノ一大演習ニシテ、之ニ參加シ、幾多啓發スルヲ得タル武人ノ幸福比スルニ物ナシ。豈之ヲ征戰ノ勞苦トスルニ足ランヤ。苟モ武人ニシテ治平ニ偷安センカ、兵備ノ外觀巍然タリトモ、宛モ砂上ノ樓閣ノ如ク、暴風一過忽チ崩倒スルニ至ラン。洵ニ戒ムベキナリ。

昔者神功皇后三韓ヲ征服シ給ヒシ以來、韓國ハ四百餘年我が統理ノ下ニアリシガ、一度海軍ノ頽廢スルヤ、忽チ之ヲ失ヒ、又近世ニ入り、徳川幕府治平ニ狃レテ兵備ヲ懈レバ、舉國



ナイル、ト  
ラファルガ  
ル  
英國水師提督  
れるそん一七  
九八年に在る  
河口ニ佛國海  
軍ヲ、一八〇  
五年とらふあ  
るが沖ニ佛  
蘭西班牙聯  
合海軍ヲ破レ  
リ。

米艦數隻ノ應對ニ苦シミ、露艦亦千島樺太ヲ覬覦スレドモ、  
之ト抗爭スル能ハザルニ至レリ。翻ツテ之ヲ西史ニ見ルニ、  
十九世紀ノ初二當リ、ナイル及ビトラファルガル等ニ勝チタ  
ル英國海軍ハ、祖國ヲ泰山ノ安キニ置キタルノミナラズ、爾  
來後進相襲イデ能ク其ノ武力ヲ保有シ、世運ノ進歩ニ後レ  
ザリシカバ、今ニ至ル迄、長ク其ノ國利ヲ擁護シ、國權ヲ伸張  
スルヲ得タリ。蓋シ此ノ如キ今古東西ノ殷鑑ハ、爲政ノ然ラ  
シムルモノアリト雖モ、主トシテ武人ガ治ニ居テ亂ヲ忘レ  
ザルト否トニ基ツケル自然ノ結果タラザルハナシ。我等戰  
後ノ軍人ハ深ク此等ノ事例ニ鑑ミ、既有ノ鍊磨ニ加フルニ  
戰後ノ實驗ヲ以テシ、更ニ將來ノ進歩ヲ圖リテ、時勢ノ發展

ニ後レザルヲ期セザルベカラズ。若シソレ常ニ聖諭ヲ奉體

# 天下雖

# 安忘戒

# 必危

辛丑亥春  
平八身起

シテ孜孜奮勵シ、實力ノ滿ヲ持シ  
テ放ツベキ時節ヲ待タバ、庶幾ハ  
クハ以テ永遠ニ護國ノ大任ヲ全  
クスルコトヲ得ン。神明ハ唯平素  
ノ鍛鍊ニ努メ、戰ハズシテ既ニ勝  
ハテル者ニ勝利ノ榮冠ヲ授クルト  
同時ニ、一勝ニ満足シテ治平ニ安  
ンズルモノヨリ直チニ之ヲ褫フ。  
古人曰ク、勝ツテ兜ノ緒ヲ締メヨ。  
ト。



大正五年十月  
三十一日ア  
リカの西方海  
岸を北へ航す  
るの記事。

七 光の國

吉江 孤雁

今我々の船は赤道無風帯にはひつてゐる。我々の船を中心として描き出され、そしてその中心の前進と共に刻々に移動して行く天と水との一大圓球、その半圓は午前と午後とによつて、交互に光の波と紫紺の波とに代つて行く。午前には右舷より見る半圓が、船を境にして一面の光を流し、午後には左舷の半圓が、ぎら／＼した波を跳らせる。この時、天空の半球は直ちに光そのものの直立した壁となつて、水の半圓の上に影を投げる。正午の前後暫くの間、この交代のまだ際立つて見えない時、

太陽はマストの眞上に懸つて、兩半圓にまた兩半球に平等の光を直射してゐる。この時、この一大圓球の水上の中心は我々の船で、天上の中心は太陽そのものである。午日の直射に對して、船の煙筒より立つ微な煙も何方へも崩れず直ちに天に向かふ。

その時、この白熱の洋上には何の響もない。たゞ船の胎内から送り出す機關と暗車との響が嘗て動搖に慣れたことのない重い空氣を驚かすだけである。そしてこのとろ／＼する光の波を押し切つて行く船の脚も、たゞ深い午睡に沈んでゐる水を醒すだけで、醒めた水は、また聲も立てず船の兩舷から惶てて遠く逃けて行く。この動波、音を立てないこの



動波は、磨ぎ澄ました古代鏡の表面へ息を吹きかけるやうに、ぽつと廣がつて、眠つてゐる仲間を呼び醒しながら先へ先へといつて、兩手を擴け脚を動かして、遠空の下、水平線の彼方、淡青色を湛へた一層の眠の國、不動の境地へと逃けて行く。

刻々に日は傾き、右舷の洋上は濃い影を刻んで、空に多少の爽涼の氣を漂はせる時になつても、この魅せられたやうな靜寂は、遂に破られない。たゞ光の烈しい抱擁を遁れたこの半面は、ほつとしたやうに伸々と紫紺の波を平に敷きつめて、どんな微動をも表面へ浮かばせず、どんな些細な表情にもその平靜を裏切らせはしない。

日の落ち行く半圓には、今烈しい光波の亂射が始つてゐる。太陽はもう少しの物惜しみもしない。有るだけの光が水上に落ちて散るに任せてゐる。今日一日のために燃した熱度のつゞく限、光皮の剥け落ちて波上に散布するのを寧ろ悦んでゐる。太陽そのものが光から早く脱して休息の床に入りたいやうに、幾重もの光の衣裳を後から後からと波の上に投げかける。

光に酔つて疲れた波は、今はこの太陽の惜し氣もなく投げかけ與へる賜を何處へも持ち運ばないで、たゞその眞下で受けてゐるだけになつた。水上からまだ稍高い處では、太陽が一時にはつと燃えて、光そのもののやうであるが、それを最後



としても早何等眼を射るやうな光は放たない。今は光皮を脱し盡くして、たゞ一個の眞紅の圓體―自然が刻み出した一大名玉の匂の高い藝術品となる。眞紅の色はやがて緋となる。この時波はたゞその眞紅の色、緋の色を小な波頭へ照りかへして、時々唇を開けてはその色を吸はうとしてゐるだけである。もう光ではない、たゞ色彩である。

八 秋十句

荒海や佐渡に横たふ天の川  
いなづまやうづまく夜の大鳴門  
江渺々釣のいと吹く秋の風

芭蕉  
鳴雪  
蕪村

殘月に日いづる原のすゝきかな  
名月や疊の上に松のかげ  
草の花水水車場へわかれゆく

虚子  
其角  
子規

子規筆



今日になりて菊作らうと思ひけり  
大寺の片戸さしけり夕紅葉  
旅人や夜寒とひ合ふねぶた聲  
猪もともに吹かるゝ野分かな

二水  
一茶  
太祇  
芭蕉



## 九 詩的言語

芳賀 矢一

およそ美文や詩歌に用ゐる言語即ち詩的言語と日常普通の言語とは、もとく、多少性質を異にして居らねばならぬ。これは日本今日の状態の様に、言文の二途に分れて居るのをいふのでは無い。西洋の様に言文一致の國でも、詩的言語と日常の交際語との間には相違のあるものである。又説明理會を主として、論理上の正確を目的とする文、即ち數學や法律文やすべて科學上の知識を傳達する目的のものは、正確で、順序が整然として居ればよく、これらはいはゆる散文語であつて、詩的言語とは自ら違ふものである。即ちよしや

言文一致の世になつても、この三つの言語の區別は、いつまでも存在するものである。純文學は言語を美的に綴つて、内界外界一切の美をあらはし出すもの、即ち言語を美的に使ふものであるから、詩的言語は他の二種の交際語、散文語とは自然に逕庭を生じなければならぬ。詩的言語は感情に訴へるものであるから、印象が極めて明瞭で、人の想像力に觸れ、讀者の感情を最も多く動かすものでなくてはならぬ。一語一句にゆるみのない様に、最もよく切りつめた文句の中に、最も多くの内容を含ませなければならぬのである。この目的から見ると、品詞の價値には自ら甲乙がある。



詩的言語として最も價値の少い品詞は、助詞、助動詞の様な附屬詞である。これらは獨立しては意味のない語で、唯他の語の下に附屬して相互の關係を示し、又はその作用を助けるものである。概念をあらはす語では無くして、形式の語である。それ故詩的言語としては成るべくこれを避けねばならぬ。必要な所にはどうしても入れねばならぬが、棄てて意味の通ずる所では棄てる様にせねばならぬ。さうすれば文章が引締るのである。次に美文に不適當な品詞は接續詞である。代名詞も又成るだけ使はぬがよい。そんならば、どんな品詞が美文の構成には最も大切であるかといへば、いふまでもなく物の動作状態を示して居る動

詞である。又性質形状を示す形容詞、それから物の名をあらはす名詞即ち概念語である。この三種の品詞が最も必要なので、これを上手に選擇して適切に使ふことを第一にしなればならぬ。詩的言語の要素は全くこの三者にあるのである。ところが日本の純粹の國語では、悲しいかな、動詞や形容詞の数が極めて尠い。随つて微妙な差別を言ひあらはすには甚だ困難を感じる事がある。現今は多くの漢語を使つてこの缺點を補つて居るが、漢語は字を見れば分るが、音で聞いては同じ様なが多い。加之、歌などでは他の純國語との調和といふ點もあつて、漢語の使用は將來の國文學の發達上肝要な問題である。外國の詩を翻譯したり、新思想を歌



に詠まうとしたりした経験のある人は、必ずこの語彙の不足を感じた事が深いだらうと思ふ。

とにかく美文作者は動詞、形容詞の様な品詞に最も多く骨を折らねばならぬのである。副詞は普通用ゐる「大いに」「甚だ」「必ず」などは詩的言語には適せぬ。新奇な熟語を巧に使へば、形容語として大きな価値を有たせることが出来る。「ほかり」「ほかり」「ふわく」となどいふ擬聲的副詞なども面白い。漢語の何々然、何々乎といふ副詞的語句が漢文の精彩を増すことは争はれぬ事實である。何しろ陳腐なものはいかぬ。新奇なものを選択して用ゐなければならぬ。これは強ち副詞ばかりに限らぬ。

一〇 秋の夜

幸田露伴

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は美しき女の童の髪  
の如し。めでたきこと誠にめでたし。なつかしきことも誠に  
なつかし。されど猶いさゝか物足らぬ心地す。冬の月は水晶  
もて作れるものを見るが如し。清さは餘りありて、味無きに  
近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果より、松の樹  
の間より、又は市中の藁の浪間より出でたる、いづれも目ざ  
ましく、心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、たゞ  
我が魂の世に浮かるゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸  
み入るやうなるを覺ゆることなし。



秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日、六日の月のふと見る夕暮の空に出で居りて、雑木の梢もろこしの



清夜 長野草風筆

垂葉などに風かす  
けく囁く、まづおも  
しろし。遠山黒く暮  
れて、素月輝を揚げ、  
庭樹のそれく、闊  
葉、纖葉の葉表の照  
葉陰の闇、おのがじ、畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽涼  
清澄の景を醸し出すさま、いづくにも有りふれたることな  
がら好し。夜更け、蟲吟じて、世の中靜なる時、たま〜、燈前に

書をさし置きて、起つて廊を歩むちなみに、窓櫺の白きを看  
て戸をおし開きて出づれば、月天心を過ぎて光華六合に漲  
り、霜に澄める夜の氣は水まさに凍らんと欲するが如くな  
る、身心頓にこの世のものならずなりたるやうに覺えて、秋  
ならでは、夜ならでは、月ならではと思はる。

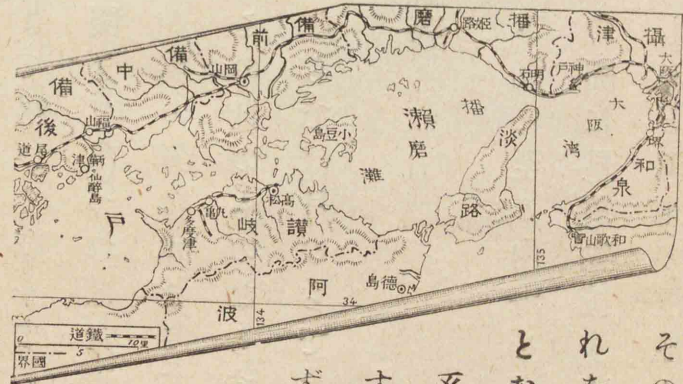
一一 瀬戸内海

淡路島より下關に至る内海を瀬戸内海といふ。瑠璃一碧、大  
小の島嶼その間に星羅點接す。蓋し今の中國、四國の地は、太  
古相聯絡せしかど、海水の浸蝕と地下の變遷とによりて分  
離し、こゝに瀬戸内海といふ多島海を化成せしもの。而して



昨日まで  
春といへば霞  
みにけりな昨  
日まで波間に  
見えし淡路島  
山(後憲法師)

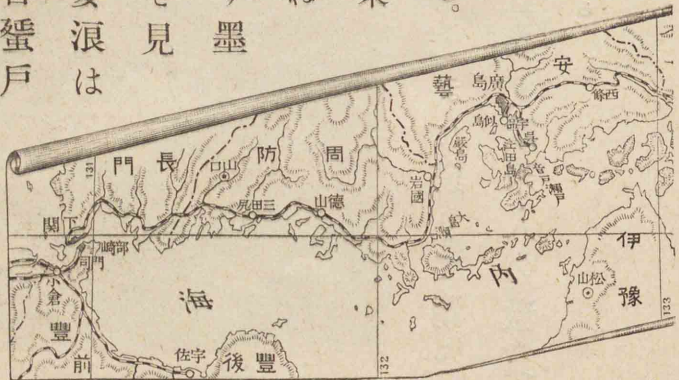
此等の島嶼は、淡路島の北半全部をはじめ、十中の八九は花崗岩にて成れり。春至りて、昨日まで波間に見えし淡路島山の霞につまざる候となれば、淡霧は



その間に點在して、桃花、菜花これら繞る。やがて東南風の季節となりても、風は四國中央の山系に遮られ、その餘力のみかすかに到りて、海面細紋を生ず。氷の如き月輪、夜この間に懸り、波光花崗岩に反映して、清輝更に加る。月色の大觀此の如くなるもの、また他に求むべけんや。

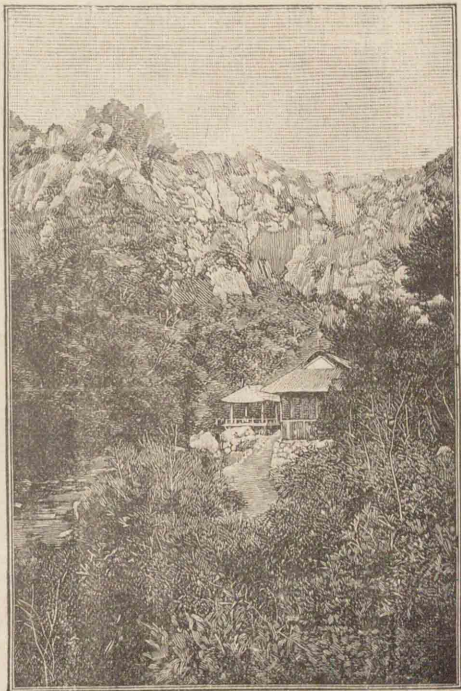
うす墨に  
うす墨にかく  
たまづさと見  
ゆるかなかす  
める空に歸る  
かりがね(津守國基)  
寒霞溪  
神懸の雅稱。  
小豆島の高峰  
星城山中にあ  
り。

諸島の頂上若しくは中腹をこめ、煙波縹渺として、景致繪も及び難し。やがて燕の新に來りて、歸るかりがねの霞める空にうす墨に書きたまづさと見ゆる頃に至れば、麥浪は海波と相接し、農舍蟹戸て飛ぶや、雪の白は岩の白と映發し、諸島皆皚々として、風趣



漸くにして秋氣長空に横たはり、風霜花崗岩骨に砒するや、楓樹は錦を谿谷に織り、島際の風煙染めたるが如し。殊に小豆島寒霞溪の紅葉の勝は、丹青も及ぶ能はず。秋去り冬來りて、六華漸瀝として、風趣





亭雲紅溪霞寒

更に一層。

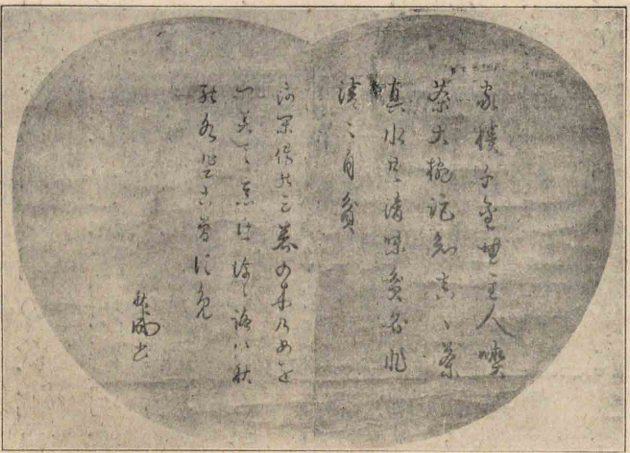
春夏秋冬の景象、此の如く妙なり。而して船をこの間に行らんか、海は島嶼に圍まれて、宛として湖に似、忽ち窮るが

如くにして忽ち開き、また窮りて湖をつくり、また開きて船を通ず。變化百回、宜なり、歐米人の激賞して世界の絶勝と呼ぶや。(日本風景論による)

一二 白峯の陵

上田 秋成

あふ坂の關守に許されてより、秋來し山のもみぢ葉見すごし難く、濱千鳥のあと踏みつくる鳴海潟、富士の高嶺の煙、浮島が原、清見が關、大磯、小磯の浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝けしき、象潟の蟹が、苦屋、佐野の舟橋、木曾のかけ橋、心のとまらぬ方ぞなきに、西



あふ坂の關  
滋賀縣近江國  
滋賀郡にその  
址あり。

鳴海潟  
愛知縣尾張國  
の東部海濱。

鹽竈  
宮城縣陸前國  
の東南海濱。

象潟

秋田縣羽後國  
由利郡の日本  
海岸にあり。

佐野

群馬縣上野國  
群馬郡。



仁安三年  
高倉天皇の御代、約七百五十年前。

白峯  
香川縣讚岐國綾歌郡にあり。  
新院  
崇徳上皇。

行はなほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は葭が  
ちる難波を経て、須磨、明石の浦吹く風を身にしめつゝも、行  
き行きて讚岐の眞尾坂の林といふに、暫く筈をとゝむ。  
この里近き白峯といふ所にこそ新院の陵はあれと聞きて、  
拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登る。松柏は奥深  
く、茂りあひて、青雲のたなびく日すら小雨そほふるが如し。  
兒が嶽といふけはしき嶺うしろに峙ちて、千仞の谷底より  
雲霧生ひのほれば、まのあたりもおほつかなき心地せらる。  
木立わづかにすきたる處に、土高く積みたるが上に、石を三  
かさねに疊みなしたるが、うばら、かづらに埋れて、うらがな  
しきを、これなむ陵よと思へば、心も搔きくらまされて、更に

藐姑射の山  
上皇の御座所  
をいふ。  
藐姑射山有神  
人居之(莊子)



菊池容齋筆  
西行

夢現をも分きがたし。  
けにまのあたり見奉りしは、  
紫宸、清涼の御座に朝政きこ  
しめさせ給ひし昔にて、百の  
つかさ人は賢き君ぞとて、御  
言かしこみて仕へまつりき。  
近衛院に譲りましても、藐姑  
射の山の瓊の林しめさせ給  
ひしを、思ひきや、麋鹿のかよ  
ふ路のみ見えて詣でつかふ  
る人もなき深山のおどろの



下に、神がくれ給はむとは。萬乗の君にて渡らせ給ふさへ、宿世の業といふものの恐しくも添ひ奉りて、罪を遁れさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひ續けて、涙涌き出づるが如し。夜もすがら供養し奉らばやと、陵の前のたひらなる石の上に座を占めて、經文徐に誦しつゝも且歌詠みて奉る。

松山の浪のけしきはかはらじを

かたなく君はなりましにけり

猶こゝろ怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけむ。日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならで、石の床、木の葉の衾いとさむく、神清み、骨冷えて、物とはなしにすさまじき心ちせらる。

一三 自覺

幸田露伴

それ自覺は眞智也、眞徳也、眞情也、而も亦大威力也。自覺に因らずんば一切の事能く成さるゝこと無く、能く保たるゝこと無し。自覺の一切の事功に及す力は、喩へば水の一切の草木に及す力の如し。一莖一葉一花瓣の微といへども、水の力の至らざるは無し。自覺の力一たび動けば、一切人間の事功は、大綱より細目に至るまで、眞正の人間の知識の漲り溢るるを見ざるゝこと無し。自覺は即ち眞智なれば也。

蓋し自覺より生ずる調査ほど嚴正なる調査は無く、自覺より生ずる辨別ほど明細なる辨別は無く、自覺より生ずる思



量決斷ほど精刻恰當なる思量決斷は無し。例せば、一人衛生の道の軽んずべからざるを自覺すれば、其の人の一切の所行は自ら衛生の道に背くこと無きに至るべく、之を衛生の道の重んずべきを自覺すること無くして、他の保護監督を被れる蠻民の、動もすれば違法の舉動を爲さんとするに比しては、甚だ安全なるべきが如し。衛生の道の重んずべきは言ふ迄も無し。然れども民庶愚なれば蒙々たり病んでは巫に問ひ、患ひては鬼に媚ぶるの俗の改らざるや、治を爲す者苦心焦慮して、法を立て訓を垂ると雖も、其の功甚だ少し。是民庶が衛生の道の重んずべきを自覺せざれば也。自覺の率ゐざる智は、喩へば氷の上の顔料の其の色美なら

ざるにはあらざれども、終に其の氷を染むること能はざるが如し。如何なる妙巧の智慧方便も、自覺せざる民庶には徒費せらるゝ定めなるこそ口惜しけれ。縁無き衆生は猶度すべくとも、自覺せざる衆生は實に度すべからざるなり。蓋し自覺せざるは即ち眞智を杜絶せるものなれば也。之に反して自覺の智に於けるは、喩へば窓を穿つて光線を得るが如し。窓あれば便ち光線あり、自覺すれば即ち眞智來る。一人衛生の道の重んずべきを自覺すれば、其の一人は必ず頓て衛生の道に於ける智を得べき也。一戸自覺すれば、一戸其の智を得べき也。一村一國自覺すれば、一村一國其の智を得べき也。而して光線あれば則ち溫熱あるが如く、眞智あれば則ち



妙果あるべく、衛生の道に於ける一人の眞智は一人の身を護るべく、一戸の眞智は一戸の民を護るべく、一村一國眞智あらば、一村一國長へに健全安穩の幸を享くべき也。自覺なる哉、自覺なる哉、自覺は眞智也。

一四 牛

三宅 雪嶺

ゲーテ  
獨逸の大文學  
者。約百年前  
の人。

ゲーテ曰く、馬は忠に勵み、義に勇み、其の主の爲には、彈丸の雨注するを冒し、槍劍の叢閃するを跳越し、猛進して而して敵に斃る。豈高潔と謂はざるべけんや。彼が如く高潔にして、何の故に手の指を開く能はず、空しく土を蹶りて終らざるを得ざるか。と。斯くして馬を以て軍人に擬すれば、牛は則ち

産業家たらん。後者は多力にして重きを曳き、能く長途に堪へて疲れず。駉駉驪驄儀容整然たるは馬に若かず、繡衣文裝王侯を乗するは馬に若かず、將又疾急迅速を旨とする、亦皆馬に若かざれど、而も巨石大材を曳き、崎嶇險難を躰え、十里を歩みて猶且疲憊せざるは、頗る馬の上に出づ。生きては乳の以て人の健康を増進するあり、死しては肉の以て美味を供し、滋養に益するあり、且皮も用ゐられ、毛も用ゐられ、角も用ゐられ、腸も用ゐられ、殆ど總べてを舉げて人の用たること、亦馬の比にあらず。死生共に大いに益する、眞に稱すべきに足る。人に在りても馬の如く、牛の如くならば、亦實に君に忠に、國に功ありと謂ふべし。



然るに牛といひ、馬といひ、常に甚だしく賤視せられ、其の  
 いに君國のために勞するに對して、何人も感謝の意を表せ  
 ざるは、抑、何を以てなるか。是究竟するに彼等の自覺心なき  
 に歸すべし。若し彼等にして、馬は主に忠なるべく、牛は世を  
 益すべきものたるを自覺して之を爲すならば、彼等の爲す  
 所や以て仁なりとして稱すべく、啻に人類と比して特異の  
 點あらざるのみならず、時として更に人類の上に超出する  
 こと無しとせず。然れども彼等は、殆ど全く自覺心を缺き、唯  
 時の勢に促されて奔勞するのみ。故に其の爲す所は洵に感  
 稱するに堪へたれども、竟に崇むべき所以を見ざるなり。  
 さは言へど、是獨り牛馬のみ然るにあらず、人類も亦同じ。能

く主君に忠義に、邦家に補益ある者は之有り、而もたゞ勢に  
 促され、知らず識らず此に到れる者は、多く稱すべきを見ず。  
 人の人たる本分を辨へ、其の進まざるべからざるを自覺し  
 而して後進み、其の止らざるべからざるを自覺し、然る後止  
 るに至りて、始めて大いに稱揚すべし。自覺なくして進み、自  
 覺なくして止るは、素と牛馬と擇ぶ無きもの、假令大いに爲  
 す所ありとも、其の精神や未だ偉とするに足らず。

一五 教訓の歌

ますらをの行くとふ道ぞおほろかに思ひてゆくなます  
 らをの友  
 聖武天皇



底ひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波は  
立て

素性法師

わりなしや人こそ人といはずともみづから身をや思ひ  
まつるき

紫式部

人ばかりおとりしもせじ月も日も何かむかしの空にか  
はれる

伊藤仁齋

憂きことのなほこの上に積れかしかぎある身の力た  
めさん

熊澤蕃山

明日もまた朝とく起きてつとめばや窓にうれしきあり  
明の月

僧 涌蓮

末つひに海となるべき山水はかねて木の葉の下くより

けん

學丹居士

をりくりに遊ぶ暇はある人のいとまなしとてぬみ讀ま  
ぬかな

本居宣長

一六 武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は、果もない萱原の光景で絶類の美を鳴らして  
ゐたやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は  
實に今の武藏野の特色といつてよい。木はおもに檜の類で、  
冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌え出る。其の變  
化が秩父山脈以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を  
通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、緑陰に、紅葉に、様々



の光景を呈する。其の妙はちよつと西國地方又は東北の者には分りかねるのである。元來日本人はこれまで檜の類の落葉林の美を餘り知らなかつたやうである。林といへば、おもに松林が日本文學美術の上に認められてゐて、歌にも檜林の奥で時雨を聞くといふやうなのは見當らない。自分もこのやうな落葉林の美を解するやうになつたのは、近來の事である。

檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。凧が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木が葉が高く大空に舞つて、小鳥の群かのやうに遠く飛び去る。木の葉が落ち盡くせば、数十里の方域に亙る林が一時に裸體

になつて、蒼すんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄み渡る。遠い物音が鮮に聞える。秋ならば林の中から起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ざる響。蹄で落葉を蹴ちらす音。これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかつてゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。



ことに時雨の音となると、これほど幽寂なものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い廣い野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽之又大様な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。

自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り武藏野の時雨の更に人懐かしく私語く趣はない。

一七 田舎すまひ

徳富健次郎

儂が住居は武藏野の一隅にある。平生讀んだり書いたりする室の廊下の窓からは甲斐東部の山脈が正面に見える。三年前建てた書院からは、東京の煙が望まれる。一方に山の雪を望み、一方に都の煙を眺める儂の住居は、即ち都の味と田舎の趣とを両手に握らうとする儂の立場と慾望とを示して居るとも言へる。

此の慾望が何處まで衝突なく遂げ得られるかは、疑問である。此の兩趣味の結合は何ものを生み出したか、若しくは生み出すか、それも疑問である。唯儂一個人としては、六年の田舎住居の後、いさゝか獲たものは、土に對する執著の意味を稍解し始めた事である。儂は他郷から此の村に入つて、唯六



年を過したに過ぎないが、それでも吾が樹木を植ゑ、吾が種を蒔き、吾が家を建て、吾が汗を滴らし、吾が不淨を培ひ、而してたま／＼死んだ吾が家の犬、猫、鶏の幾頭幾羽を葬つた一町にも足らぬ土が、今は儂にとつて著物の如く、寧ろ皮膚の如く、居れば安く、離れれば苦しく、之を失ふ場合を想像するに堪へぬ程愛著を生じて來た。己れを以て人を推せば、先祖代々土の人である農其の人の土に對する感情も、其の一端を覗ふことが出来る。此の執著の意味を多少とも解し得る鍵を得たのは、田舎すまひの御蔭である。

然しながら己れの造つた型に囚れ易いのが人の弱點である。執著は常に力であるが、執著は終に死である。宇宙は生き

て居る。人間は生きて居る。蛇が衣を脱ぐやうに、人は昨日の己れの死骸を後ざまに蹴て進まねばならぬ。個人も國民も永久に生きるがために、日々死んで新に生まれねばならぬ。儂は少くとも永住の形式を取つて村の生活を始めたが、果して此處に永住することが出来るか、どうか、疑問である。郊外電車は、もう儂の居村に鐵軌を敷き始めた。とんかんといふ鐵の響が近來警鐘のやうに儂の耳に轟く。是は早晚儂を此の巢から追ひ立てる退去令の先ぶれではあるまいか。愈電車でも開通した暁、儂は果して此處に蹈み止るか、寧ろ東京に歸るか、或は更に文明を逃けて山に入るか。今日では儂自らも解き得ぬ疑問である。



蘇武  
漢の武帝の時  
命を奉じて匈  
奴に使したる  
人。

一八 蘇武

坪内逍遙

風颯々の秋ふけて、  
日をかさねたる旅衣、  
重き君命いたゞきて、  
遠く匈奴の國に入る。

野邊の草木や鳥の聲、  
聞く物の音も見る色も、  
いづれか夷のものならぬ。  
思へば遠く來つるかな。

ながれゆく水音たてて、  
胸にうれへの波高し。  
故郷母あり、雁なきて、  
老の寐覺やいかならん。  
よしや、幾夜のくさまくら  
旅寢の空にむすぶとも、  
國家のために盡くすべし。  
君命おもく、身は輕し。



かうと覺悟は定まりぬ。  
使命つぶさに傳へつゝ、  
匈奴の王に面接し、  
蘇武は國書を呈しけり。

もとより非道の王なれば、  
國書の旨意は聽かざれど、  
單身敵地に使せし  
蘇武が勇氣ををしみつゝ、  
ある時蘇武を召しよせて、

「降り仕へよ。ちかあらば  
おもく汝を用ゐん。」と、  
説き諭せども、聽かざれば、

國王大いに怒をなし、  
蘇武を捕へて、荒山の  
窟の中に幽閉し、  
食を與へで、くるしめぬ。

頃しも北風雪を吹き、  
寒さ膚をつんざきぬ。



飢うれば枯草を雪に和し、  
命をつなぐ料となす。

日數経れども死せざれば、  
えびすら怪しみ且おそれ、  
こたびは蘇武を野に移し、  
羊の群をまもらせて、

「牡羊はらむことあらば、  
放免せん。」とあざけりぬ。  
覺悟はしても無念さに、

寐られぬ夜も幾度か。

一夜雲なく、月澄みて、  
秋も最中の空のいろ、  
せめては「かくてあることを」と  
雁に託せし筆のあと。



蘇武牧羊

渡邊華山筆



かくて春去り夏來り、  
 また秋の風、冬の霜、  
 落葉落葉のかさなりて、  
 十有九年夢の間や。

老いて屈せぬ忠節を  
 天助けてか、不思議にも  
 雁の使のかひありて、  
 楽しきたよりぞきこえける。

國と國との和議成りて、  
 蘇武は赦され歸りしが、  
 立ち出でし時の黒髪は  
 いつしか雪とぞなれりける。

一九 伊藤博文公を誄ぶ 井上馨

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、  
 韓國兇徒に狙撃せられて、暴に清國吉林省哈爾賓驛に薨す。  
 嗚呼哀しいかな。予何ぞ多言するに忍びん。然りと雖も予君  
 と交る五十餘年、異體同心、生死苦樂を共にし、國歩艱難の秋  
 に始り、太平富貴の日に至り、始終渝ること莫し。自ら謂ふ、交



友の誼今古に愧づる無しと。予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君予の垂死を哭すること二回、予幸に君の交情看護に因つて再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。嗚呼哀しいかな。回憶すれば四十七年前、文久癸亥の仲夏、君予と偕に發憤して海軍の術を學ばんと欲し、禁を犯し、潛に泰西に航し、居る



伊藤博文

こと僅に半年餘、馬關、鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に還り、首として開國を唱へ、故國を危難より脱せしむ。内訌尋いで起り、予

高杉  
高杉晋作。

木戸、大久  
保二公  
木戸孝九、大久保利通。

王臣匪躬  
王臣塞々、匪躬之故。(易經)

は暗夜要撃に遭うて殆ど死し、君は高杉を助けて兵を擧げ、藩論を回復し、我が一大危機を轉過せり。已にして王政復古し、乃ち徴士に擧げられ、版籍奉還の際、君木戸、大久保二公を佐けて尤も力あり。維新の績此よりして破竹の如し。進取の宏謀を翼賛し、維新の大業を成就す。勅を奉じて憲法を創定し、長く國家の本を固くし、其の他法律制度の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となりて勲業の盛を極め、首めに韓國統監となりて保護の範を立つ。君學漢洋を該ね、識東西に通ず。尤も東洋の平和を以て念と爲し、常に忠節道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と



爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向かひて北滿の野に見學す。

古才留遺跡予載吊忠魂被祓  
豈公志春慈望天剛仰見後  
潤節漣々與松存

題 藤子子載松

伊藤博文



伊藤博文書

忠君報國の厚きに非ずんば、孰か能く此の如くならん。豈謂はんや、君の忠節にして茲の不測に遭ひ、暴に異邦の地に薨ぜんとは。嗚呼、哀しいかな。

古人云ふ

公雖云亡、其志則存、國有成法、朝有正人。持而守之、有一母隕。匪以報公、維以報君。天子聖明、神母萬年、民不告勤、公志則然、死者復生、信我此言。(蘇轍)

君の訃、電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟黃童、織婦、耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣、紳士に至るまで、親しく弔電を發して我が不幸を言はざる莫し。内外新聞争うて君の才德勲業を稱贊し、中外著望の盛、振古未だ君の如きあらざるなり。抑、予は又之に因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち舉國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに務め、以て君の志を紹ぐべし。古人云ふ、匪以報公、維以報國、死者復生、信我此言と。庶幾はくは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼、哀しいかな。

二〇 提唱

夏目漱石



提唱のある場所は一窗庵から一町も隔つてゐた。蓮池の前を通り越して、それを左へ曲らずに眞直に突き當ると、屋根瓦を嚴めしく重ねた高い軒が、松の間に仰がれた。宜道は懷に黒い表紙の本を入れてゐた。宗助は無論手ぶらであつた。提唱といふものが、學校でいふ講義の意味である事すら、此處に來て始めて知つた。室は高い天井に比例して廣く且寒かつた。色の變つた疊の色が古い柱と映り合つて、昔を物語る様にさびはててゐた。其處に坐つてゐる人々も皆地味に見えた。席次不同におもひくくの座を占めてはゐるが、高聲に語るもの笑ふものは一人もなかつた。僧は皆紺麻の法衣を著て、正面の曲衆の左右に列を作つて、向かひ合はせに竝

んだ。其の曲衆は朱で塗つてあつた。

やがて老師が現れた。疊を見詰めてゐた宗助には、彼が何處を通つて、何處から何處へ出たか、さつぱり分らなかつた。た



夢 窓 國 師

だ彼の落付き拂つて曲衆に倚る重々しい姿を見た。一人の若い僧が立ちながら紫の袈紗を解いて、中から取出した書物を恭しく卓上に置く所を見た。又其の禮拜して退く態を見た。

此の時、堂上の僧は一聲に合掌して、夢窓國師の遺誠を誦し始めた。おもひくくに席を取つた宗助の前後にゐる居士も、

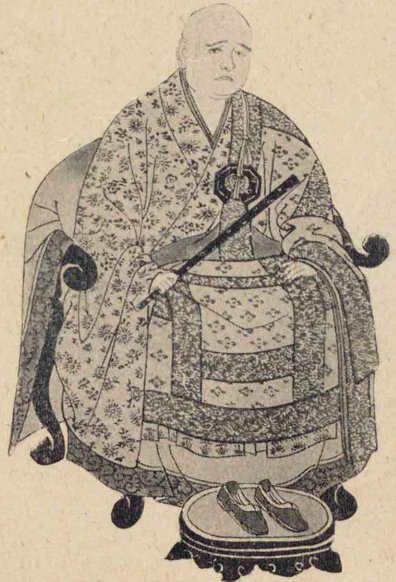
夢窓國師  
名は疎石。京  
都嵯峨天龍寺  
の開祖。吉野  
時代の人。



皆同音に調子を合はせた。聞いてゐると、經文の様な、普通の言葉の様な、一種の節を帯びた文字であつた。

「我に三等の弟子あり。所謂猛烈にして諸縁を放下し、專一に己事を究明する、之を上等と名づく。修行純ならず、駁雜學を好む、之を中等と云ふ。云々」といふ、餘り長くはないものであつた。宗助は初め夢窓國師

大が何人であるかを知らなかつた。宜道から此の夢窓國師と大燈國師とは、禪門中興の祖であると云ふ事を教へられたのである。平



大燈國師  
名は妙超。京都紫野大徳寺の開祖。後醍醐天皇の御代の人。

生跛で十分に足を組む事が出来ないのを憤つて、死ぬ間際に、「今日こそおれの意のやうにして見せる。」と云ひながら、悪い方の足を無理に折つべしをつて結跏したため、血が流れて法衣を染ましたといふ大燈國師の話も、其の折宜道から聞いた。

やがて提唱が始つた。宜道は懐から例の書物を出して、頁を半ば擦して、宗助の前に置いた。それは宗門無盡燈論と云ふ書物であつた。始めて聞きに出た時、宜道は、有難い結構な本です。」と宗助に教へてくれた。白隠和尚の弟子の東嶺和尚とか云ふ人の編輯したもので、重に禪を修行するものが浅い處から深い處へ進んで行く徑路やら、それに伴なふ心境の

白隠和尚  
名は慧鶴。臨濟宗中興の高僧。江戸中世の人。



變化やらを秩序立てて書いたものらしかった。中途から顔を出した宗助には、能くも解せなかつたけれども、講者は能辯の方で、黙つて聞いてゐるうちに、大變面白い所があつた。其の上參禪の士を鼓舞するためか、古來から斯道に苦しんだ人の閱歷譚杯を取交せて、一段の精彩を著けるのが例であつた。此の日も其の通りであつたが、或處に來ると、突然語調を改めて、此の頃室内に來つて、どうも妄想が起つていけない杯と訴へるものがあるが、と急に入室者の不熱心を戒め出したので、宗助は覺えずぎくりとした。室中に入つて、其の訴をなしたものは實に彼自身であつた。一時間の後、宜道と宗助とは袖をつらねて又一窗庵に歸つ

た。其の歸路に宜道は、あゝして提唱のある時に、よく參禪者の不心得を諷せられます。」と云つた。宗助は何も答へなかつた。

二一 元寇 その一

三 宅 雪 嶺

元、使者を遣はして好を通ずるを求め、時宗斷乎としてこれを拒み、而して戰端遂に啓かれたり。こゝに自ら三個の疑問の出づるあり。その一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。その二、拒絶は果して道理を具へしか。その三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の意よりせしにあらず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關



せし所にして、寧ろ國是の然らしめし所と謂ふの當るべし。初め元の我に使者を遣はしたる、實に文永五年にあり。時宗



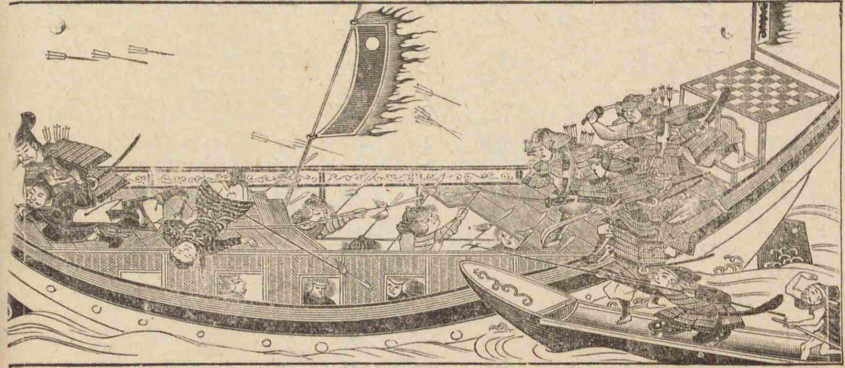
年甫めて十八、その拒絶の獨斷ならざりしや知るべし。爾後元の使者相續いで到る數次、十三年を經て弘安四年に至り、終に大舉して入寇す。時

に時宗意氣方に旺壯恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を鑿殺したる、時宗與りて功ありとす。但十三年間同一の方針なりしは、國論のこれを致

ししものとすべし。

元の好を通せんことを求め、而して我のこれを拒絶したるは、稍穩ならざる觀あれど、彼の國書を閱するに、實に我が拒絶するの已むべからざりしを知るべし。その書、文辭堂々、恩威竝び具る。彼必ず以て我を心服せしむるに足ると爲ししならんも、顧て我が日本の歴史より察すれば、全然拒絶するの外、他に採るべき策あらず。その「通問結好、以相親睦」といへる、辭として難すべきなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視するの態あるは、その語に明なり。彼自ら何の異とする所あらざるべきが、我に在りては古來未だかの如き不遜の國書に接したることあらず。隋唐の頃より我が天皇



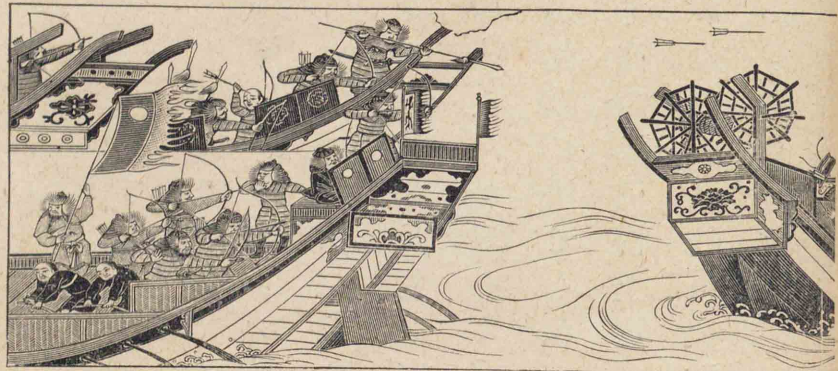


と彼の皇帝とは全く對等なるものと信じたり。我が國民上下は對等を以て自ら居り、動もすれば神代以來の系統に觀て、我遙に他に優ると信ぜしきへ少からざりしに、端なくかの如き國書に接す。怒らざらんと欲するも、豈能く得んや。當時かの國書を覽し者、一として書辭の不遜なるを咎め、且憤らざりしは無かりしならん。國土の廣狹相懸隔するの著しきを考へて、國力を誤信せし者は、成

蒙

古

襲



るべく圓滑に局を結ばしめんとして、開戦に躊躇したらんも、理非は既に明白なりしなり。  
 元主使者を派して我を促し、我これを斬りて首を梟せしかば、その怒りて兵を發し、入寇せしもの、彼に在りて已むを得ざりし所ならん。則ち已むを得ざりし所ならんと雖も、そのこゝに出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若し能く我が國情に通ぜしならんには、決してこ

繪

卷



こに出でざりしなり。彼既に開戦に決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風俄に起りて、兵船多く覆没す。我が兵これに乗じて襲撃し、殆どこれを殲滅せり。乃ち言ふ者あり、當時若し颶風の起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならんと。言者の説にして當れりとせば、則ちかの開戦に決せしは策の宜しきを得ざりしものと謂ふべきに似たれど、しかもその言ふ所や實に謬れるの甚だしきもの、我が開戦に決せしは必勝の算ありしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵皆上陸し得たりとせば、彼我の勝劣則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばかりの軍隊を以て能く日本征服の功を擧げ得べきか。

## 二二 元寇 その二

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も進歩せしと稱せられし時、我に寇せし兵船はかの閣龍の亞米利加發見に用ゐしより尙堅固なりきと傳へらるれど、その颶風に遭ひて多く破壊せしに觀ても、以て略構造の如何を察するに足らずや。彼累りに諸邦を征服せしかど、かく多數の兵船を運用せしは曾てこれ無し。また操船に巧なりしかも疑なきを得ず。既に十萬二十萬の軍隊を送遣せし後、猶絶えず兵站の連繼を過たざること、果してその能くするを得る所なるか。糧に敵に據るの心算なりきとすとも、全軍を支ふるに足る



べき食料を徴發するは、頗る困難なる業ならずや。若し我に於て拱手無爲彼の欲するがまゝに從ひしならば、或は徴發に依りて全軍を給養し得たるべけれど、これ到底望みて得べからざる所ならずや。

嘗に軍隊給養の難きのみにあらず、彼我交戦の結果、彼また勝つべからざる運命ありしなり。承久の亂、北條氏の兵畿内を指して西上せし者十九萬人、若しこれに關西の兵を合はせば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに、我は地理に精しく、便利を占むる亦多し。十萬二十萬の元兵を撃擢するに於て何か有るべき。戰亂を見ざる五十餘年に互りきと雖も、國を擧げて武門の治を享け、武を練るに

於て未だ嘗て一日も怠らず。爾後久しきを経ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間唯戰爭をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず。當時この鬱勃たる士氣を以て元兵に對しきとせんか。これを殲滅するは寧ろ易々たりしなり。且マルコポーロの記する所に據れば、元兵の大敗せるもの、兩將の不和に由りしが如し。我が軍の士氣旺壯なるを以てして、彼が主將の不和なるに加ふ。單にこれのみを以てすとも、勝敗の數既に明なりとすべし。如何なる點より察すとも、我彼を殲滅するの理ありて、彼我を征服するの虞なし。我の斷々として拒絶せる、決して無謀の擧にあらず。神風の加護に頼りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは、謬想に過ぎず。



さらば龜山上皇の身を以て國難に代らんことを祈らせ給ひしは、全く無益の事とすべきかといふに、決して然らず。既に上皇の御身を以て國難に代らんとし給ふを目睹す。國內



元世祖

の民誰か奮つて國に殉ぜんとせざらん。これがために上下舉りて國難に當らんとすの決心を固めたるや、疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來りしとせんか。我が兵の如何に勇を鼓して邀撃せしかは知るべきなり。その海上に於けると同じく、これを陸上に鏖殺したるを必するに難

からず。颶風の起りしは幸といふよりも寧ろ不幸といふべし。元兵にして上陸したらんには、我初め多少の苦戦あるべけれども、終に全勝を制し、更に勢に乗じて高麗を略し、かくて醞釀しつゝありし國內の紛争を移して、外地の經略を事としたるなるべく、爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げしのみならず、東洋全體亦大いに進歩の見るべきありしならん。颶風起りて戦はずして勝ちしより、竟に武を海外に用ゐず、徒らに國內の紛争に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極といふべし。

元は一敗して後更に再舉を圖らんとせしが、諫むる者ありて遂に廢せり。智とすべきなり。この一役に於てだに海岸到



る處に造船の音喧しく、爲に費しし所莫大の額なりきと傳ふ。故を以て若し一敗に懲りずして再舉を圖り、一層多大なる準備を整へて我が國に來寇せしならば、國力の底を傾くるに至りしこと疑ふべからず。何ぞ八十年後に分割せらるるを待たんや。

二三 冬十句

炭竈に手おひの猪の倒れけり  
木がらしの地にも落さぬ時雨かな  
鹽鯛のはぐきも寒し魚の店な  
突き碎いて紅散亂す炭團かな  
凡兆  
去來  
芭蕉  
鳴雪

北枝よりはじめて咲くや六の花

立圃



立圃筆

晴る、日や雲をつらぬく雪の富士  
ともし火を見れば風あり夜の雪  
雪の日やあれも人の子樽ひろひ  
宿かせと刀なけ出す吹雪かな  
來年はくくと暮れにけり

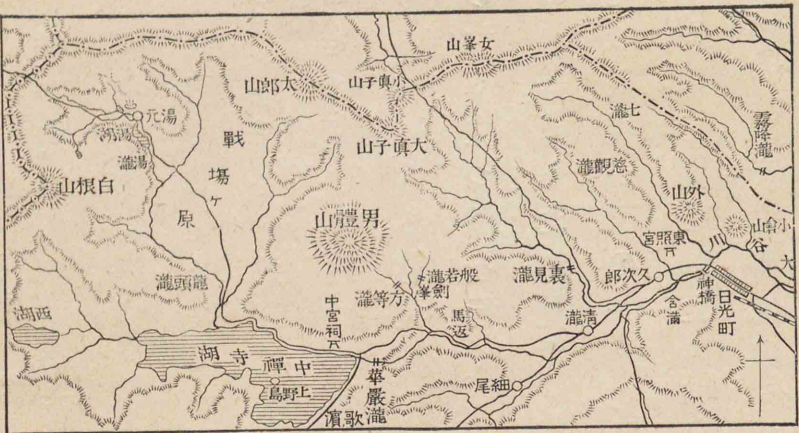
几董  
蓼太  
冠里  
燕村  
露川

二四 戰場が原



蟲鳴かず、禽歌はず、白雲悠々として動く日光戰場が原の荒涼たる畫趣は、吾等一行が夢に思ひ現にあこがれしものにして、如何にして其の廣漠たる枯野が原を描かんかと、幾度か語り幾度か考へしことありしが、今朝起きいでて今日描くべき戰場が原の光景を思ひ浮かべし時は、あやししく心騒ぎて、何となく胸安からず。

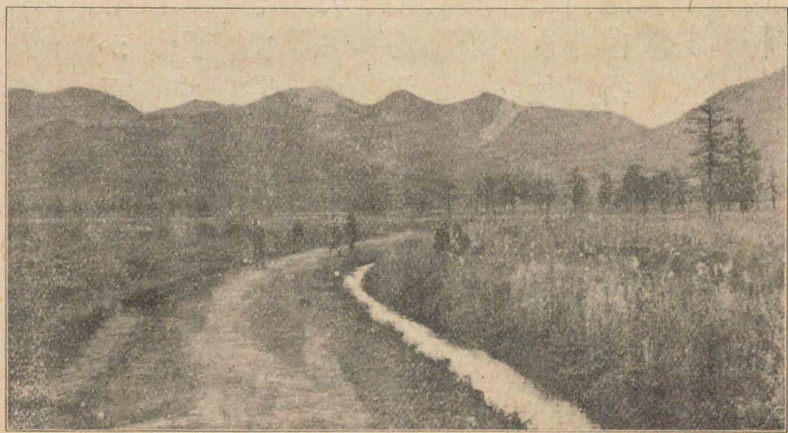
障子開けば、夜來の風雪全く霽れて、高く澄みたる空には雲の影も無く、熙々たる天日、湖上長く連なれる白根山脈の上を照らせば、皚々たる雪は白瑠璃の如く輝きて、其の美しきこと言ふべからず。近くは湖畔の大銀杏樹、落葉松の林、家々の屋根、雪ある處は皆輝きて、白虹爛々、恰も水晶宮裡に火を



點じたるが如く、春の花、秋の紅葉も、いかでか雪降り埋みたる湖山の風景に比するを得べき。朝風寒き山陰の湖傳ひ、枯れたる草、落ちたる木の葉の上を蹈みて、別墅の前を過ぎ、左に湖水の波白く光るを眺めながら、林をぬけて汀に出で、また再び森の間を行く。路は迂餘曲折して、榛、山毛櫨の大木高く聳え、熊笹深く、茂りたる草の中には、朽ちたる大木横たはり



て、絲の如き清水その下より湧けり。森の奥、木深き處に、名も知れぬ鳥の聲幽に聞えて、空は高し。雲は白し。地獄谷を過ぎて、龍頭瀑を寫生せる頃より、路は次第に急になりて、枝疎なる落葉松の幹白く矛盾の如く立つ間を行く。  
登り盡くしたる絶頂は、荒草離々たる戰場が原の一端にして、三山を以て圍まれたる廣漠たる大高原は、眼を遮るものも無く吾等



原が場戦

の前に開かれたり。

右に紫褐色の肌を露せる男體山の、幾條となく疊みたる皴皴に名残の雪をとゞめ、黄土色の色美しく圓き形したる太郎山は、其の左に連なりて、最も左に高く白きは雪の白根山、其の裾に廣き戰場が原は、見渡す限り茶褐色に枯れて、遙に遠くく連なりたる落葉松の林は、一抹の霞の如く山の麓にたなびきぬ。今しも吾等の蹈める道は、太郎山の麓を左にかけて、細きこと絲の如く、消えんとして纔に残れり。その盡くる處、匹練の如くかゝれるは、即ち湯瀧なるべし。

神代の昔、男體山の神と赤城山の神と争ひし處なりといふ傳説残るこの大高原は、二千有餘年の間、住む人も無く、草は

赤城山  
上野三名山の  
一。



生ふるまゝに生ひ、枯るゝまゝに枯れ、雪は積るまゝに積り、消ゆるまゝに消えて、茫々漠々、恰も神代のまゝなる寂しき光景は、吾等の胸に異様の想像を起さしめぬ。

試に人跡絶えたる冬の空の、野も山も雪に蔽はれたる戦場が原を想像せよ。人間の力全く跡を絶ちて、たゞ自然のまゝなる水晶宮の裡、たけりにたけりたる男體山の山神、右手に白銀なす玉矛を取りて、空に向かつて麾けば、遠く西の空に一簇の雲起つて、襲ひ來る風に乗つて天降る赤城山の山神、緋に紅に耀く衣の色、雪に照り日に映じて、こゝに矛は飛び劍は舞ひ、一大修羅場を現出したる光景は如何。あゝ、勇ましき神話の好畫題にあらずや。  
(日本名勝寫生紀行による)

二五 雪前雪後

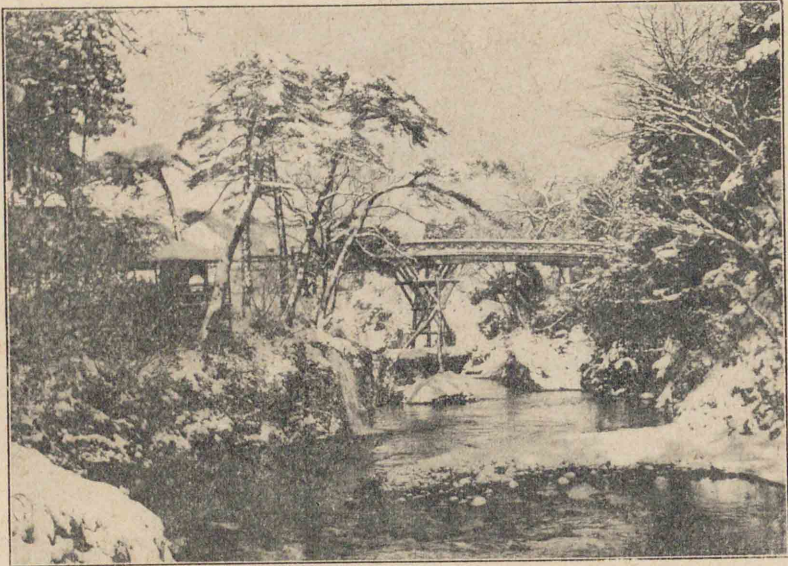
幸田 露 伴

雨も好し。露も好し。霞も霽も天より降るものの面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて、風無き寒さに、雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れて、ちら／＼と降り出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑に融け盡くす終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、櫛の葉に堅き音立て、板底にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の



雪の大きく軽らかに降りて、落つる間もなく色無き水の昔にかへる淡々しさも懐かしく、消ゆるくもいさゝかは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松、梅、樅などの梢には天華俄に落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の見て美しきは、冬の末かけて春の初頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。細かならず、水めかぬ雪の大きく且軽やかに、霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹緲をあざむき、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼



（加賀山中山温泉）雪の溪

もあやに、美しき限なり。すべて降る時の眺には、廣きところより狭きところ好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えすして廣きは却つて狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の



馬をさへ  
馬をさへ眺む  
る雪のあした  
かな(芭蕉)

溪廣野よりは市中の園よろし。  
霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡くして鏡新  
に明なる空の蒼々と朗なるが下に、渣滓錬り去つて銀曇な  
き地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙に開けたる、常の日  
はた、裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ  
無きだに、面白くおもはる。馬をさへ眺むると人の云ひたる  
日、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた  
還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。  
西の京は金閣、銀閣、眞如堂、岡崎、東山、清水皆畫とすべし。栂尾、  
槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寐覺の床の、巖は鬼  
斧に任せて千古冷に峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐ろに流

山王臺  
麴町區にあ  
り。



雪の金閣寺

る、雪の日の凍  
れる寂しさに、翠  
蓋梢重く、壁の簷  
を頂ける松の村  
立のあたり、姿を  
も見せで名をも  
知らぬ山の禽の  
餓を鳴きたるな

んど、二十年の昔の、今の胸に猶あざやかなり。  
東の京は御溝の水おだやかに、浮寐の禽の夢も安けく、雪に  
閑なる大御代の晝、また比無くめでたし。山王臺今猶好から



溜池  
山王臺の東南麓にありしを今は埋めた

待乳山  
隅田川の西岸淺草公園に近き小丘。

相生橋  
深川區越中島より京橋區新佃島に架す。  
中島  
越中島の一

んが溜池の有りし昔いたづらになつかし。不忍の池一望千頃の景はいはずもあれ、石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れがたき雪の闇夜に、何か物言ふ鴨のさゝめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとかや云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりとたゞふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、

欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

二六 鳩巢に與ふ

新井白石

昨日は御報拜誦驚嘆是非に及ばず。然りといへども火急の處に御全家御異事なく、御多幸と思召さるべく。只々惜しむべき事は多年御拮据にて御求得、御書籍と御手録のものとのこと、承り、心苦しめ。但し、これも身より外の物、是非に及ばず。貴兄既に御學業も成就、これより後書籍を頼みて頼まぬこと、令郎いまだ御學文未成業の御事にて、



買田問舎

劉備曰、君求田問舎、言無可采。(魏志)

四書

大學、中庸、論語、孟子。

史記

百三十卷。漢司馬遷撰。支那上古より漢の天漢年中までの歴史。

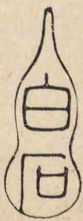
漢書

百二十卷。東漢班固撰。西漢の歴史。

尙友古人



白石



天爵堂圖書印

印の書藏び及章印の石白

せめて書籍をば御残し御謀の事あながちに俗輩買田問舎等のことに比すべからず。某家藏の書もとより多からず。へども、二重になり。もの少々これあり。書目の簿も何の中にか入れ置き。ゆゑ、昨夜尋ね。へども知れず。覚え。處は四書、史記、漢書などこれあり。すなはち、令郎へ進ずべく。この外の書、恩賜のもの外は、何にても御用次第御貸申すべく。御事も缺かせ申すまじく。

秦風に  
豈曰無衣。與  
子同袍。(詩  
經)

この節手前の事、御物語申し。通り故に、わづかの御用にも立ち。はぬ事口惜しく。へども、力無く。御上著など。これ無く。はんか。その段は恩賜のもの。猶これあるべく。必ず御心置なく。仰下さるべく。廉潔を立て。ゆも、事にもより。相手にもより。よのつねの同門も。兄弟の親に同じく。況や、たゞに同門と申すばかりにも。これなく。秦風に與子同袍と申すは。このことに。仰下され。すこしも。すこしも。はづかし。かるべき事にも。なく。

(原文節録)

二七 白石に與ふ

室 鳩 巢



昔延喜年中にあつて菅相公儒家よりいでて、時に用ゐられ權を専らにす。時に三善清行書を奉りて菅公を諫むるに、身をつゝしみ災禍に遠ざかるの道をもてす。夫菅公の材徳古今に傑出して、丞相の貴に居れり。本より天下の衆の畏服する所にして、誰か敢へて間然するものあらむや。然るを清行一介の賤士をもて、ひとり其の威嚴を冒して人のいはざる所をいへり。そのかみ恭靖先生いましし時に、僕と此の事を論じて、清行をもて天下の奇士とせり。僕おもへらく清行豈奇士の名を求むる者ならむや、實に菅公を愛するの深きに出づるのみと。今吾兄徳望の高き事、菅公に比するに如何といふ事

恭靖先生  
木下順庵。

仁を輔くる  
の道  
君子以文會  
友、以友輔仁。  
(論語)

をしらずといへども、其の學術文章においては、恐らくは菅公のおよぶ所にあらず。加之聖主の知遇に逢うて、其の材力を振るふ事も、菅公の後いまだ儒臣の此の如くなる事をきかず。僕むかしより同門交を辱うして、近頃眷顧の厚きを蒙る事、日久し。竊におもふに、吾兄を愛するのふかき、誰か僕にしくものあらむや。清行是を疎交の相公にいふ事を得て、僕これを同學の故人にいはざらむは、既に徳を磨くの情にそむき、又仁を輔くるの道にたがへり。今吾兄の寵隆を聞いて忠告するもの必ずいはむ、今より以後迎接をつゝしみ、權利に遠ざかれと。是常人の知る所也。豈吾兄の爲に論するにたらむや。



僕のいふ所はこゝにはあらず。吾兄志氣の間にあり、吾兄朝廷において將順匡救の功頗る赫々として人の耳目にあり。然れども古人天下に大勳勞あるに比せば恐らくはいまだ竝稱するにたらず。吾兄の豪傑なるをもて、胸中に藋芥ばかりもせざるべし。豈是等么麼の事をもてみづから滿つるの志あらむや。たゞ盤根錯節利刃にのがるゝ事なうして、破竹の勢あるによつて、其の詞色の間おのづから剛銳果敢の氣盛にして、謙退抑損の心すくなし。吾兄もそのかくのごとくなる事をおほえざるべし。書に曰く、有<sub>スレバ</sub>其善喪<sub>セ</sub>厥善、矜<sub>ニ</sub>其能喪<sub>フ</sub>厥功と。僕願はくは、吾兄其の善を有せず、其の功を矜らざらん事を。

孟之反

子曰、孟之反不伐、奔而殿、將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也。

馮異

東漢創業の功臣。謙退にして伐らず、功を論ずるに當りては獨り樹下に避けたりといふ。

盈つるを惡んで  
人道惡盈而好謙(易經)

孟之反が其の馬に策うつ、聖人に稱せられ、馮異が樹下に避くる、古今の美談とせり。これ吾兄の法とるべき所なり。正考父が鼎の銘にいはいはく、一命而僂、再命而偃、三命而俯、循牆而走、亦莫余敢侮と。蓋し其の位愈のほれば、其の心愈下れり。譬へば堂を作るに、上一尺の崇きを添ふれば、下一尺の基をますがごとし。然らざれば必ず傾覆の禍あり。方今聖明上に臨んで讒毀の患なく、かの延喜の時とひとしからずといへども、盈つるを害して謙るに福し、盈つるを惡んで謙るを好するは、天人不易の常理なり。慎まずんばあるべからず。僕ねがはくは、吾兄謙謙の心を秉つて、天人の道にかなひ、よく其の譽を終へ



て、徳言瑕つかざらむ事を。今吾兄寵錫の新なるを聞いて、祝をもてせずして規をもてす。たゞ吾兄其の愚を哀んでこれを察納せよ。不備。

## 二八 趣味

幸田 露伴

趣味は人の嗜好なり、見識なり、思想なり、氣品なり、性情なり。性情は淘汰せざるべからず。氣品は清高なるべし。思想は汚下ならざるを要す。見識は卑陋なる無きを欲す。嗜好はひと節ありたし。趣味の無下に低く浅きは口惜しきことなり。自ら培ひ、自ら養ひ、自ら生したてて、我がおのづからなる心の色の花と生り出づべき趣味をば、秀で榮えしむべきなり。

目覺むるやうなるを好むあり、心締るやうなるを悦ぶあり、淡きを好しとするあり、濃きをいとしいふあり、艶やかに美はしきをめづるあり、沈みてさびあるを望むあり。人の趣味は人の面の形の異なり、聲の色の殊なるが如くに、千差なり、萬別なり。自を以て他を律すべからず。彼に従ひて此を枉けんもまた難し。趣味は人々の心の花のおのづからなる色なればなり。花を染めて本の色ならぬ色と作し、花を洗ひて本の色ならぬ色と作さんとすとも、誠にそれ何のかひあらん。されどもそれ〴〵の花は培ひ養ひ、よく〴〵生したてて、その自然の色を春秋の天の下に心ゆくばかり豊に放ち舒べしむべし。人々の趣味は培ひ養ひ、よく〴〵生したてて、そ



の自然に基づく趣味の香をおほどかに世に發ち薰らしむべし。

足らざることを知るは滿つるに到るの路なり。至らざるを悟るは上に向かふの途なり。吾が趣味のなほ足らざるを知り、なほ至らざるを悟る者は幸なり。其の人の趣味將に漸く進み漸く長ぜんとす。吾が趣味の幼きをも省みで、我が善しとするものを必ず善しとし、我がをかしとするものをいつもをかしとして、高きに遷り、卑きを改むることをせぬ者は幸無し。其の人の心の花既に石と化りて、生命を失ひ居ればなり。

簪の必ず黄金ならんことを欲し、衣の必ず縮緬ならんこと

を欲するは慾望といふものなり。趣味といふものにはあらず。慾望は我を桎梏す、自在なし。趣味は我を繫縛せず、自由あり。趣味低く、慾望強ければ、其の欲するところの物を得ざるに當つては苦惱千萬端ならん。趣味高く、慾望淡くば、其の欲するところの物を得ずとも、適樂一二様のみならじ。雞兒腸の花の幽なるを簪にすとも、棣棠の花の香なきを簪にすとも、薔薇の一輪の白く蒼めるを簪にすとも、落霜紅の數顆の紅なるを簪にすとも、其の人の趣味より見て善しと爲さんには、木の端、竹の片を簪にすとも、亦復満足と喜悅とは有るべし。時に應じ、處に従ひて、何の時にも、那の處にも、怡悅の情を見出し得るは、趣味のなすところなり。其の物を得ざれば



苦しみ、其の願を遂げざれば悩み、吾が心を外の物の奴婢として、之に使役せらるゝは、慾望の然らしむるなり。慾望は人を窘しめ、趣味は人を活かす。趣味饒なる人は幸なるかな。おのれに得ること有りて人に待つこと無き、之を徳と云ふ。心に怡しむことありて物に累はさるゝことなき、之を趣味と云ふ。苟もよく趣味を存するや、荒涼凄寒の境に在りとも、亦以て樂しむべし。培ふべし、養ふべし、生したつべし、人の趣味性。

## 二九 歐洲大戦と工業 その一 秋山眞之

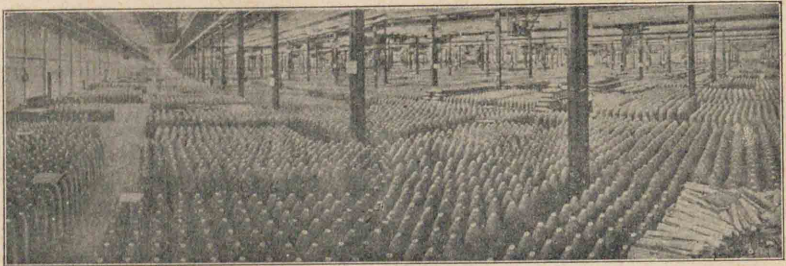
今次の歐洲大亂の實況を視ると、海戦は勿論陸戦でも、機械

の力が七分通り働き、人間の力は残りの三分位なもので、寧ろ人間が機械に使役されて居るかの觀がある。

海戦の要素が主として機力であることは、今更いふまでもないことで、砲煩、水雷、探照燈などが已に機械であるのみならず、之を裝載する軍艦、驅逐艦、潜水艇その物がまた大きな意味での兵器で、動くにも、走るにも、攻めるにも、防ぐにも、一つとして機力に依らぬことはなく、その相對抗する戦鬪距離も今日ははや十海里以上に延長し、例へば一方は東京、片方は横濱に足場を構へて相戦うて居るやうなものであるから、直接に肉眼で敵の艦影を認め難く、唯機械の力で敵の位置や距離を測定し、機械的に大砲、水雷を發射して戦うて



居ると、潜水艇が水中から間近く潜つて来て、不意打を食はせるといふやうな有様である。されば晴の戦場では甲板上の勇士は稍張りあひの無い譯であるが、是が人智の發達に伴ふ事物の進化であるから、致方がないのである。陸戦の方も今日は海戦同様に機力的に變化するやうになつた。小銃、野砲は勿論機關銃、野戰重砲、榴彈砲、塹壕砲のやうな直接の破壊兵器が皆機械的であるばかりか、塹壕を掘る開鑿機も、地雷の坑道を穿つ鑿岩機もまた機械的で、その開鑿機も今は一時間に三哩も掘れるものが出來たさうだ。故に鐵條網で固めた十數線の塹壕を無數の重砲彈で地ならししながら攻撃前進する間には、はやその前に新塹壕を設け



(場造製彈砲國英)彈砲たつ上來出

て防禦されるのであるから、敵身方共に攻撃の捗らないのも無理はないのである。また戦線附近の軍隊輸送その他、重砲、糧秣などの運搬は、大部分は自動車の機力に依るもので、是がなくては今度のやうな大陸戦をすることは出來ない。獨逸軍が當初破竹の勢で白耳義から佛國に侵入し、巴里も既に危くなつたとき、巴里の防禦軍團は數萬の徵發自動車に分乗して、獨逸軍の右翼に迂廻し、その側背を脅



利  
 マルヌの勝  
 マルヌは佛國  
 東北部を流る  
 る河。大正三  
 年九月六日よ  
 り十日までこ  
 の河域に會戰  
 ありき。



英國鐵甲車の奮戰

威攻撃した。是が功を奏してかの  
 マルヌの勝利となつて、遂に敵軍  
 を撃退することが出来たのであ  
 るが、もし當時巴里に徴發の出来  
 る自動車があつたならば、佛軍  
 のこの作戦は出来なかつた譯で  
 ある。また獨逸軍が約八箇月間數  
 十萬の犠牲を供して奪取に執著  
 したヴェルダン要塞が遂に能く持  
 ちこたへたのも、一つは自動車の  
 功である。當時ヴェルダンに通じる

二線の鐵道は敵彈に破壊せられ、佛軍の増援、軍需の補給な  
 どは悉く後方十數哩の村落から差立てた一萬有餘の自  
 動車に依つたものである。

それから敵情偵察や彈著觀察に無くてはならぬ飛行機も、  
 その全體が機械である。佛軍の強いのも、一つはその優勢な  
 飛行機で能く敵情を知り、且重砲の効果を發揮し得るから  
 である。その他英軍が始めて戰場に持出して、獨逸軍に一驚  
 を喫しさせた鐵甲車も全く機械の應用であつて、英人が之  
 を陸上の弩級戰艦と稱して居るのも、當然である。

三〇 歐洲大戰と工業 その二



かやうに海陸軍の戦闘力の出處を穿鑿してみると、大部分は機械である。そこで今日の戦争は機械の戦争であるといへる。またその機械を運轉して居る原動力からいふと、石油の戦争である。これらの機械は皆内地工業の産み出したものであるから、この點から見ると、また工業の戦争といはねばならぬ。而してその工業は人間の營んで居るものであるから、結局はやはり人力の戦争となるのであるが、従前のやうに戦場に立つて外で働くのみならず、内で兵器彈藥などを造り出すものが却つて重要な間接の戦闘員になるのである。

現に英佛諸國などでの實狀を見ると、十七八歳から五十七

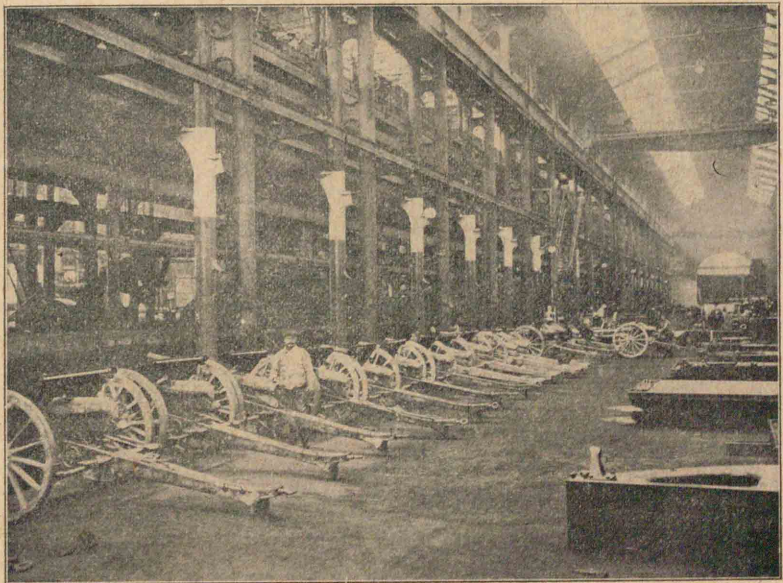


戦時佛國婦人の爆彈製作

八歳までの男子は大抵國民兵となつて出征し、各軍需工場  
 で男子が不足すると、數多の女  
 工が之に代つて、随分烈しい力  
 業をなし、老人や子供はその製  
 作品の荷造や積出をして居る。  
 即ち女房や娘の造つた彈藥で  
 その亭主や兄が敵と戦うて居  
 るのである。今日は戦争までが  
 夫婦親子の共稼となり、敵に對  
 して間接直接の相違はあるが、  
 眞正な國民皆兵の主義が自然



に實現されて居る。  
我が國も他日かやうの  
戦禍に遭遇したならば、  
やはりこの通りに男女  
老幼を問はず、舉國皆兵  
で事に當るより外はな  
いのである。然るに現在  
のやうな工業の程度で  
は、人間はあつても道具  
が揃はず、人口六千萬の  
内、大半は戦争の役に立



(廠工器兵國佛)砲野たつ上來出

たないで、唯餘計な心配をして見て居るだけであらう。英國  
のやうに、民間の工業があつての通り發達して居る處で、出来る  
だけの工業動員を行つてすら、尙不足を感じて、新規に増築  
や擴張を斷行し、戦前の工業力の三四倍にもした位である。  
このやうな大規模の戦争に對して、我が國の官立海陸軍の  
工廠だけでは、その軍需の十分の一位を充たすばかりであ  
る。多少平時の準備があつたとしても、半年以上を支へるこ  
とはおぼつかない。自分はこの點から見て、切實に我が民間  
工業の發達を希望して止まないものである。





大大大  
正正正  
七七七

大正八年度臨時  
定價金四十二錢

有所權作著  
嚴禁轉載  
本書原圖  
製複許不

中等  
教育  
國語讀本  
卷六終

卷六

三三



